

《正岡子規(36)の続き》その285

平岸 三八

梅原龍三郎の「浅井 忠先生の回想」は、『天衣無縫』(昭和五十九年十月十五日発行 求龍堂発行)に載せられている。梅原の文章と諸家との対談を集めたもので、2冊揃い(分売不可)で、合計千頁もある。

「回想」はB6判で8頁もある長文だから、迎も全文を引用する訳にはいかない。ごくごくはしょって、要点だけを引く。

昭和四十年七月執筆だから、師の浅井の死後60年にもなつてからの文章だ。

現存の人で浅井 忠の門下生は実に少数になつた。私が日本で先生と考へ尊敬して今に敬愛の情を失はない唯一の人である。(中略)明治三十三年文部省留學生でフランス留学、明治三十五年帰朝、新設の京都高等工藝学校教授となる。たちに京都聖護院の自宅に洋画研究所を開設した。

(中略)当時京都に田村宗立、櫻井忠剛等油絵の先生がいたが、皆浅井 忠の名声と人格に傾倒して、こぞつて子弟の全部をその研究所に寄託した。

私はその開所日に出席、初めて浅井 忠の風貌に接した。長身温顔、フランス人のやう

な美髯で一見人を魅し、尊崇させる美丈夫であつた。思へば四十六、七歳であつたが老成人の風格であつた。

その日どんな話があつたか記憶はない。翌日から研究所に通つた。(中略)

アトリエにはヴィナスの首とセネカの首の石膏があつた。みな木炭で写生した。半日はみな三脚と画板をさげて鉛筆で景色の写生である。(中略)かなり出来ないと彩画のおゆるしが出なかつた。

巴里郊外や、ロアン河畔グレの景色、伊国ナポリの海岸、航海中の香港など水彩画の傑作が数多く研究所の壁に掲げられてゐた。みなこれを感じ嘆し、大なる参考品であつた。

この秋(注・明治35年)に久しく不振であつた関西美術会展覧会が開かれて、浅井 忠の滞欧中の全作品が陳列された。グレで出来た美しい多くの油絵を初めて見た。(中略)講武所(注・工部美術学校のこと)時代に師事したフォンタネージが、いかに優秀な画家であつたはしばしば語られた。私は明治四十五年(一九一三)初めてローマに行つた時、その国立美術館で多くの作品を見て、鬱然たる大家であることを知つた。

浅井は最も優れた弟子でその旧作に充分天稟の画作を發揮してゐたが、彼のフランス留学ほど著しい進歩を得た人は他に類を見ないものと思ふ。(中略)当時まだフランスの一般には少しも認められてゐなかつた印象派に多く学ぶところがあつて、浅井の新しい画風は

生まれたものと思ふ。

(中略)安井曾太郎も開所後一年頃入学して最初から偉質は儕輩を抜いてゐた。

浅井の作品の最傑作は渡仏中幾度も、また、長く滞在したグレにおいて多く成されてゐる。和田英作が一緒の時期もあつて、一緒に書いた日記など「ホトトギス」に連載されてゐるのを生徒等は引っぱり合つて読み、フランスの風物と生活にあこがれたものである。

(中略)

正岡子規、夏目漱石等と親交のあつた浅井は文人の面があり、京都でたちまち多くの風流人にとりまかれ、黙語、木魚などと署名して戯画、大津絵などを多く描き、樂焼きに絵づけする。(略)

われわれは先生にもつと油絵に熱中してゐたかと思つてゐたが、自身その気があつたか屋敷内の土蔵を改造してアトリエにし(中略)、浅井はこの住居をことごとく気に入つていたが、土蔵のアトリエが出来て間もなく家主の都合で立ちのかねばならなくなり、知恩院山内の古い広くどつしりした、しかし薄暗い家に移つた。その頃から何となく元気が衰へたやうに思つた。明治四十年(一九〇七)十二月十六日急逝した。行年五十二歳。関節炎の悪化と聞いた。

安井はその一年前、研究所の友津田青楓と共に渡仏した。自分は師の死去の翌年七月、同じく研究所の友田中喜作と共に巴里に着。(中略)